

六

花



6

2023

リっかはいくかい

そらになる

山田 六甲

そらになる心へ花の吹雪かな
花は葉に輪廻の風の和らぎぬ
みよしのの山を包みぬ花吹雪
コバルトや九塞溝きゅうさいこうの雪解水
笑ひそむ飯い豊いで月山安達つさんあだたらも
磐梯の五色沼なる春の雨
山形は佐藤錦のさくらんぼ
川音のワルツにくづれ花は葉に
神様の覆い盆ち子ごうらなひ紅は吉

母の日にと

神吉のいちご

涅槃図や佛の鼻をつまむ弟子
戸袋の鳥たちも無事巢立ちけり
たち吉の小皿に独活のからし和
大岩を撫でては藤の雨催ひ
父の忌の麦藁で編む蚩籠
大いなる岩を撫でたる藤の花
立山の雪解とともに召されけり
お茶漬の湯を沸かしゐる端午かな
石楠花の紅は来世の人の色
育子より稲美名代の柏もち
丸尻は素敵な温み若葉冷
鴉の子天平鴟尾に鳴きにけり

清諒園

悼木村久美子さん

ちりめん山椒

那谷寺

三足の鳥

てんと虫少し止まつて飛びたちぬ 出口 誠

てんとむしすこしとまつてとびたちぬ
悩むことがあると初心に還れとよくいわれる。初心とは何か、俳句を始めた動機である。悩みが出たら、何事も一度立ち止まって、しばらく呼吸を整えて再び飛ばばいいのである。少しが良い。

(六甲)

豆撒や軽くなりたる家中 江見 巖

まめまきやかろくなりたるいえのなか
「魔を滅する」と言われる節分の豆まき。家中にとりついていた魔が退散すると家も主人公も軽くなったような気がしている。豆まき魔滅に通じる豆。家の中が良い。

(六甲)

夫に肩揉まれてちよいと暖かし 草場つくし

夫はたいしたことをしていないが、妻にしたらその好意に肩の荷が下りたようで気分的にも暖かくなつて喜んでゐる。季題は「暖か」春。

(六甲)

雪嶺抄

ぶつかりさう ◎ 笹村 政子

紅梅の香に濃淡のありにけり

梅の香の身丈に添へる日暮かな

枝垂梅地に一寸の余白あり

深吉野の音の弾ける木の芽かな

わが故郷周防の空を鶴帰る

剥製の鶴のまなざし鶴帰る

青柳の影の揺れゐる濠めぐり

あと先にぶつかりさうなしやぼん玉

土雛のくづれし頬のくづれけり

土雛の襲かさねの色のかけらかな

あと先にぶつかりさうなしやぼん玉

吹き口を離れる時は順序正しいが、一旦ストロークを離れると折角生まれたしゃぼん玉も千々に乱れて互いに触れ合うかもしれない。あつという間に、消滅してしまう。138億年前に始まった宇宙のほんの刹那の出来事にだれも関心を持たないが、彼女は文字に書き留めてしゃぼん玉の存在を永遠にした。しゃぼん玉はぶつかり合わないでも自然と壊れる運命を背負っているけれど、せめてその寿命を全うさせてやりたいと願うのである。「紅梅の香に濃淡」も優れた発見。

春の土 ◎ 志方 章子

紅を濃くあるかなきかの楓の芽
 水温むざぶざぶと菜を洗ひ
 紅梅の苔あられのやうにかな
 嫁入りの道具のひとつ雛人形
 城の空一瞬暗み鳥帰る
 春泥の子等楽しげでありにけり
 山独活の太き香りをばりばりと
 外に出れば匂うてきたる春の土
 梅紅し我を残して友逝くか
 吸物に匂うてきたる三葉芹

外に出れば匂うてきたる春の土

長い冬の間は部屋を締め切り籠っていたが、その間に嗅覚も衰えていたのか、戸外に出ると春の土の匂いが強く感じられたという。家の中の匂いはいつの間にか慣れて感じなくなるが、暖かくなって外に出たら急に室内と違う匂いに気づいた。春の匂いである。土の匂いに春を感じ取った嗅覚を句に仕立てたのが佳い。冬場の室内の匂いと戸外の匂いとの違いに気づくのは詩歌の嗅覚もするどい証左である。外にも出よという有名な句もある。

はまなす抄

猪口咲き ◎ 升田ヤス子

浅春や利休鼠の映る沼
 猪口咲きの椿男が拾ひけり
 絵画展出でて春光新たなる
 刈草の動くとみれば雲雀の子
 摘む音の良き露の臺ふたつほど
 先生が好き中庭の陽炎へる
 舟遊び水陽炎の葦の中
 棟上げの札もつ人の陽炎へる
 水占の文字透けぬたる梅の宮
 日おもてに鶺鴒の羽ひろぐ菜の花忌

猪口咲きの椿男が拾ひけり

短詩形には見間違ひ読み間違ひの面白さも楽しい。掲句の場合「椿男？」しかも「猪口でいな男？」と思わせられるのも短詩の面白さでもある。掲句は椿の花が十分開ききつてないものが落ちているのを男が拾い上げたという眼目の句。まあ、落椿がまだうら若い蕾から少し開きかけたまま落ちた乙女になぞらえてあるのだろう。その椿の形状がお猪口のようなので猪口咲きと詠んだ。侘助の花は猪口（ちよく）咲きやラッパ咲きのものが多いとも。ヤス子独自の俳句。

かげろふに ◎ 善野 行

梅折つて古徳利に活けにけり
をちこちにむめのわらうてをりにけり

花手水彩とりどりに光る風

かげろふに心一途の解けけり

島影をかげろうて行く小船かな

航跡のかなたの岸の霞かな

公園の乙女椿に逢ひにゆく

黄水仙うれしき風を呼びにけり

うららかや今が一番若い人

鶯の声聞きながら藪掃除

かげろふに心一途の解けけり

陽炎は混沌である。ある一途な思いが陽炎の中で混沌となりやがてほどけて来たというのである。か。いやいや解けるといふより判らなくなってきたとも思える。一途といふのは夢のように魘(うな)されているが、「分かっていてもなかなか醒めないから夢というのよほく」と中島みゆきも「新曾根崎心中」で歌う。西行法師もこの句のようであったと思っているが、西行は歩いて夢から覚めようとあがいたのか。山頭火も放哉も同じ迷いに彷徨ったのか。ふと掲句のように凝り固まった心が解けたら余計に混沌としてくるような気もする。一途はいっことも。夢撰候補。

別府抄

黙の子と ◎ 廣畑 育子

黙の子とそつと繋ぎしコートの手

沈丁の赤き蕾の尖りをり

如月の望月ならむ梅かほる

花頭窓梅に目白の首つ丈

古墳より望むタンカーかぎろへり

対岸の乙女椿の仄明かり

梅の園列なしてをり穴子めし

島近き明石の大門陽炎へり

静かなる糸遊の沖まぶしめり

太松の大きく傾ぎ竜天に

黙の子とそつと繋ぎしコートの手

もくではなく短詩では「もだ」と読む場合が多い。掲句は言語障害か何らかの障害で話がうまく出来ない子であろう。その子の手をコートに隠してしっかりと繋いで歩く。子供と大人は手で会話をしているのだろう。黙っていても気持は繋がる。その手はコートの中でしっかりと繋いでいるから、子供の気持もよく伝わって判るし、子供も手を繋いでくれている安心があるのだろう。私も子供のころ女先生がよく手を繋いでくれた。きつと私も子供のころ障害者であったと思う。おんな先生はその後校長先生になつたが「山田君」と呼ばず、「としちゃん」と名前前で呼んで手を繋いでくれていた。だからこの句はよく理解できる。

八十路 ◎ 田尻りき

大丈夫だ既読に安堵今朝の春
催花雨や不安数多の八十路なる
孫にハグされて春愁晴れにけり
鴨がゐて鯉がゐて投ぐパンの屑
竹藪に山つつじのみ輝けり
今つくし触れなば青き不満吐く
いかなご買ふ列に二時間耐へにけり
金属光の頭ふりつつ鴨の陣
もろ人に花照る城の大芝生
花びらを払はずすわるベンチかな

草萌え ◎ 永田万年青

冬晴や岩より岩のごとく亀
疎まれし三万体の雛人形
白浜のパンダの遊ぶひな祭り
鍵穴に手こずつてみて凍返る
春の鯿遡上しつ輪を描きけり
春来たるセンター街の賑はうて
草萌えや日毎に高くなる工事
春日和昔の友に出会ひけり
この先の景色は如何に春日和
春たけて皆が野球の評論家

催花雨や不安数多の八十路なる

催花雨（さいかこ）とは春、早く咲けと花をせきたてるように降る雨。ほかに養花天なども桜の前という天候の言も。春の雨が盛んに咲くのを促すけれど私はもうすでに八十路になったのですよと天に向かってつぶやくのか、昔ならもうあの世に行っても何の不思議もない年齢。だが掲句はまだこの先が不安というのは、生きるつもりなのだろう。不治の病に罹った人が聞いたら怒る。

冬晴や岩より岩のごとく亀

岩というより石かなと思ったが、石では少し小さい気がして、岩で良いと思った。冬晴れの日向ぼっこをして岩のように動かない。緊張しているのだから心地よいひと時を楽しんで身体を温めているにちがいない。「変温動物辞典」によれば太陽光に含まれる紫外線によって、栄養を吸収するため紫外線を浴びないと、栄養不足で甲羅が変形してしまう」とも。甲羅干しは命にかかわる為であったとは知らなかった。万年青も甲羅干しをしてみてもいいがだろう。また、甲らを干すことによつて、体に付いた寄生虫を落としたり、体温を上げて活動的に動けるようになる。日当たりのいい場所は、いつも争奪戦で命にかかわることだともいう。

鳥帰る ◎ 谷口 一献

霾やボンネットにへのへのもへじ

鳥帰る親に言はれることもなく

墓参り憂鬱地獄の釜のふた

一献は城の桜を愛でながら

春雨や満開近き城の朝

春雨の異櫓の翳りをり

二分咲きの二分は満開花便り

花冷に爛か冷やかを迷ひけり

呑むほどに深みに嵌る春愁

両肩にピカピカの春背負ひけり

鳥帰る親に言はれることもなく

「鳥帰る」は春の季語。帰る鳥、小鳥帰る・小鳥引・鳥引く・引鳥など。日本で越冬した渡り鳥が北方へ去ること。雁、鴨、白鳥、鶴等に代表されると歳時記に。よく俳句では亡くなった人に例えて詠まれることが多い。だが掲句は誰に教えられたわけでもなく時節がくればそれぞれが、または集団で帰っていく、のが不思議だと感じている。多分帰巢本能の遺伝子が組み込まれているから鳥たち本人も分かつず帰っていくのだと思うが、それにしても不思議なことよと詠んだ。掲句は「親に言われなくても」という気持が働いて出来た句であろう。「こんな子を産んだ覚えがない」とよく母親は嘆いたが、「ほくもこんな子に生み落とされた覚えがない」と母親に食ってかかったことが何回もあった。一献は良家の子息だから、こういう句が生まれたのだろう。以前にも郭公の托卵の句がある。

箕面抄

てんと虫 ◎ 出口 誠

靴紐のほどけてをりぬ春の昼

靴紐を結び直して春の昼

春の昼鼻からマスク外れけり

鼻の上マスク直して春の昼

てんと虫飛びゆく先のアスファルト

てんと虫少し止まつて飛び立ちぬ

我が前に少し止まりしててんと虫

花びらの十枚以上椿咲く

花びらの少し縮んですみれ咲く

水仙を咲かす発泡スチロール

てんと虫少し止まつて飛び立ちぬ

ただの光景を素直に定着させた写生句だが、何か深味を感じさせる。読者は、なぜ天道虫が止まったのか今までどうしていたのだろうか、どこから飛んできたのだろうか、疲れたのだろうか何か気になる物でもあったのか、なにか匂いでもしたのだろうか、食べ物でもあったのだろうか、雌でもいたのだろうか、その次にはどこかへ飛んでいくのだろうか、など想像はふくらむ。そのふくらみが時には読者を惹きつける。俳句が出来ないときには誠のように写生にもなることである。夢風撰

家の中 ◎ 江見 巖

小梅かな半分照らす絵蠟燭

紅梅や雀と人の話し声

まんさくや間歇泉のうしろより

バレンタイン解くよろこびの箱の紐

若鮎を狙ふ鶉の目の速さかな

小鳥来てついばんで行く椿かな

猫の夫放浪終へて帰りくる

キリンよりつたひ落ちくる雨水かな

豆撒や軽くなりたる家の中

校庭や卒業式のリハーサル

須磨の奥抄

夫に肩 ◎ 草場つくし

暖かな日差しに足を放り出し

夫に肩揉まれてちよいと暖かし

水温み水面をさぐる濠の鯉

つくしんぼ頭は袴から覗き

春の雨肩濡らしつつかさず傘

春の雨オランダ坂を濡らしゆく

花時や十五の吾子の旅立日

春の日や愚息の旅行プレゼント

春の日や父になるとの知らせあり

城あとは四方八方春の風

豆撒や軽くなりたる家の中

豆を撒いて豆の分だけ目方が軽くなったのではなく、冬の間しばらく重い空気の籠った家の中が気分的に大きく軽くなったというのである。邪気を祓い鬼を追い出す追儺の夜のことである。鬼を追い払うためと称して煎豆（いりまめ）を撒く年中行事。食へ物を撒き散らす行為は散供（さんぐ）といって、下級の神霊に供物を供える一つの方法であった（日本儀式辞典）。また、栄養不足になる冬のたんぱく源としても豆を炒って食べるのもその所以である。夢風撰。

夫に肩揉まれてちよいと暖かし

夫と書いてつまと読む。内容は夫に肩を揉んでもらって、なにより季節の先取りで温かくなったよ、という。照れ隠しか「ちよいと」と言っているが本音は随分と温かくなった、嬉しい、と喜んでいる場面。因みに辞書を引くと「ちよつと」「ちよつぱり」は、くだけた言い方。「ちよいと」は、「さらにくだけた言い方になる。」という。少しでもなくちよいとという文字を幹旋したところにはにかみも感じられて夫への愛情へも垣間見る。この句を夫に見せたら「何だちよいとか」と不満をいうかも知れぬが夫としては随分と嬉しいのである。

春キヤベツ ◎ 磯野青之里

汚るとも子らの元氣や末黒原

春の雨光となりて花の央

葉先より雨滴地に落つ春の雨

啓蟄や土にしみこむ液追肥

焼け土筆ずんぐり頭もたげけり

温もりの瓦葺きかな雀の巢

ほどほどに包む赤子や春キヤベツ

戦死者の墓碑の整列彼岸西風

栄螺殻回し抜きだす肝の色

角打ちの顔は馴染みや春の宵

ほどほどに包む赤子や春キヤベツ

赤子のくるみ方は親がよく知っている。ほどほどに赤子は赤子なりにしつかり包んで貰うのが一つの安心。しかしきつくすると窮屈で泣いて親に訴える。その加減は赤子を経験してきた親にはよくわかっていると思う。私も赤子のころきつく包まれて難儀をした覚えが今にも記憶にある。また包むは春キヤベツの巻方にも通じて面白い。空気と水分を含んだ瑞々しい野菜は春の気分富んでいる。キヤベツは昔、カンラン（甘藍）、タマナなどもいっていた。西洋から導入され改良同化された野菜のうちで、最も日本人の嗜好に合い、生産量が多く重要なものの一つに数えられている。と牧野辞典に。